



パートナー情報誌
Kasumi

- ・新型コロナ禍での環境学習 1～2P
- ・植物同好会観察活動の計画 3P
- ・私の細道(34)新庄 4P～5P
- ・コラム「新聞スクラップから」 5P
- ・新パートナー紹介 6P
- ・センターからのお知らせ 6P
- ・編集後記 6P

パートナー情報誌 KASUMI 第24号(通巻62号) 発行日 令和2年7月31日

「新しい生活様式」をふまえたセンター内環境学習について

パートナーの皆様には、環境学習をはじめ、霞ヶ浦環境科学センターでの様々な活動で大変お世話になっております。新型コロナウイルスが私たちの生活の中に入り込み、「3密を避ける」「ソーシャルディスタンス」「新しい生活様式」という新しい言葉が日常的に使われるようになりました。それに伴い、私たちの生活の仕方や周囲との関わり方も今までとは大きく変わってきました。例年、4月に実施させていただいていたパートナー研修会も、7月開催の運びとなり、『「新しい生活様式」をふまえた霞ヶ浦湖上体験スクールでのセンター内環境学習』という内容で研修を実施させていただきました。今回は、この場をお借りして、パートナー研修会で共有させていただいた「新しい生活様式」と「センターでの環境学習」について紹介させていただきたいと思っております。

【授業の形態について】

新しい生活様式をふまえた形態で授業を実施していきます。霞ヶ浦湖上体験スクールは、1回あたりの参加人数を25名までに制限し、換気を十分に行った展示交流広場で授業を展開することで、3密の状態を回避するようにしました。また、顕微鏡等の覗き込む機器の使用を避けるため、当面の間「プランクトンの観察」は実施いたしません。環境学習実施前と団体入れ替えの際には、テーブル、椅子等の消毒を行います。パートナーの皆様には、センター内環境学習において子どもたちに寄り添ってサポートをしていただいております。これからも、心の距離は子どもたちの近くに保っていただきつつ、パートナーの皆様の安全確保のためにも、ソーシャルディスタンス等の新しい生活様式をふまえた形態でご協力いただければと思います。



(パートナー研修会の様子 7/8)

【野外観察の学習】

野外観察の学習では、パートナーの皆様にも子どもたちの先生になっていただき、「魚の観察」「植物プランクトンの観察」「動物プランクトンの観察」「霞ヶ浦の観察」「野鳥の観察」「植物の観察」の

6か所に分かれて霞ヶ浦の魅力を子どもたちに伝えていきます。新しい生活様式をふまえ、観察の方法をいくつか変更いたしました。植物プランクトンの観察では、顕微鏡の接眼レンズにデジタルカメラを設置し、モニターを介して植物プランクトンを観察するようにしています。動物プランクトンの観察では、双眼実体顕微鏡を使用せず、肉眼でのミジンコの観察に変更して実施しています。

子どもたちは野外での活動が大好きです。そして、パートナーの皆様から教えていただく霞ヶ浦のお話に興味津々です。子どもたちの知的好奇心を高めていただきつつ、3密を避けるための手立てや声掛けをしていただけるよう、お願いいたします。



(野外観察 「植物の観察」)



(野外観察「霞ヶ浦の観察」)

【水質調査の学習】

水質調査の学習は、子どもたちの「水環境への意識の変化」が手に取るようにわかる学習です。昨年度までは6名程度のグループごとに水質調査の実験を行っていましたが、新しい生活様式をふまえ、実験器具の共用を避けることができるよう、「一人1実験」で学習を展開しています。そのため、試料水3種(霞ヶ浦の水、河川の水、うすめた醤油の水)を小さなビーカーで個々に準備して実験を行います。水の色やにおい、透視度、CODの値を比較し、湖や川に生息する魚たちや自然にとって「清らかな水」とはどのような水なのか、私たちが霞ヶ浦の環境を守っていくためにできることは何なのか、ということ、実験を通して実感を伴いながら学んでいきます。パートナーの皆様には、実験のサポートや実験準備のお手伝いをさせていただいており、子どもたちは充実した学習をすることができています。



(水質調査の学習の様子)

子どもたちはパートナーの皆様との学習を楽しみにしています。これからも、パートナーの皆様のご協力を賜りながら、子どもたちとともに環境学習をすすめていきたいと思っております。環境学習の活動にご興味ございましたら、ぜひ一緒に霞ヶ浦の魅力を伝えていきましょう。

(センター 中島)

令和2(2020)年度「霞ヶ浦湖岸植物同好会」活動の計画

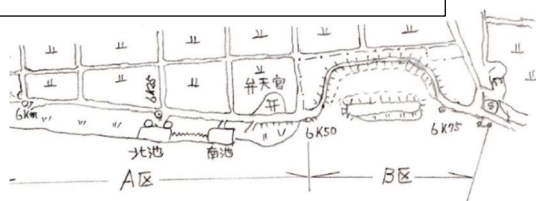
今年度は環境学習推進活動の一環としてセンター主催の「自然観察会(植物)」に於ける補助活動及び「いきもののにわ」の整備・観察学習活動と、パートナーの自主企画活動としての「湖岸植物定点観察」を行う。自然観察会は霞ヶ浦が育む豊かな自然に直接触れることによって霞ヶ浦に興味・関心を持ち理解と親愛を深めてもらう目的で、特定月の原則第3土曜日に実施される。

湖岸植物定点観察は自然再生地を含む湖岸(下図)で、環境の変化が植物相に及ぼす影響を見るため原則毎月第2水曜日に実施する。湖岸の代表種、絶滅危惧種、特定外来生物などは指定種として年間を通して継続観察する。またその他の植物についても特徴がある花・実・冬芽などを適時に観察・記録する。毎月観察の概要と共に旬の植物写真に説明を付け2階展示コーナーに掲示します。



自然観察会に於ける補助活動
R元-9.-7 崎浜アサザ群生地

地区別観察のポイントと指定種等



A区:(H19 再生事業)再生地北小池オニナルコスゲ、南小池サジオモダカ等生育状況、弁天前低地改修後の出現種
B区:再生地低地水際改修後の植生・出現種



A区弁天前低地改修後 R2.3.11



HI区(H27-29 再生事業):ヤナギトラオ(県Ⅱ)・ジョウロウスゲ(国Ⅱ 県準)・ミクリ(国 県準)・ノアズキ(県準)・サンショウモ(国Ⅱ 県ⅠB)・トチカガミ(国 県準)・セイタカヨシ(県準)・オニナルコスゲ・ドクゼリ・マツカサススキ等希少種を含む以前からあった種の生育状況、カンエンガヤツリ(国Ⅱ 県準)・タコノアシ(国 県準)・カワヂシャ(国 県準)・ウスゲチョウジタデ(国 県準)・ノニガナ(県準)等希少種を含む再生地に出現した在来種(ヌマガヤツリ・ヒロハノコウガイゼキショウ等)及び特定外来生物オオバナミズキンバイ・ミズヒマワリ・オオフサモを含むヒレタゴボウ等外来種の生育状況、I区追加種:ササバモ(県Ⅱ)、フトイ、コウキヤガラの生育状況

EFG区:ヌマアゼスゲ(国Ⅱ 県ⅠB)・ノウルシ(国 県準)・ジョウロウスゲ(国Ⅱ 県準)等希少種生育状況、E区伐採跡地のアレチウリ(特外)出現状況、G区養浜後出現種
KL区:アサマスゲ(国 県ⅠB)・オグルマ・タンキリマメ(県Ⅱ)・オオフサモ(特外)生育状況

湖岸植物定点観察の年間予定

活動月-日	関連活動
R2-4- 8	済 春季 9:00 集合
5-14	済 "
6-10	済 夏季 9:00 集合
7-10	済 "
8-12	"
9- 9	秋季 9:00 集合
10-14	"
11-11	"
12- 9	冬季 9:30 集合
R3-1-13	"
2-10	"
3-10	春季 9:00 集合
3-24	同好会打ち合わせ R2 年度反省・R3 年度計画

注記:・下傍線の植物名は年間観察指定種 ・()内は絶滅危惧種の
カテゴリ区分 ・(特外):特定外来生物

(日程) 9:00 集合(冬季は 9:30)・準備(記録用紙,カメラ他)
9:30~12:00 現地(AB 区 EFG 区 HI 区 KL 区観察)
12:15~昼食 12:45~13:15 新出種等確認 13:15~15:00
記録整理

自然観察会(植物)年間予定

今年度の募集予定は「新型コロナ」騒ぎで中止となっています。中止が解除になりましたらセンターホームページ等で連絡されます。

「いきもののにわ」整備活動の予定

原則,毎月第4水曜日 10:00~11:30 (9月は第5水曜日の30日)

作業内容:除草,間引き,移植,コンテナ・プランターの整理,名札整備等

(パートナー 有吉)

芭蕉の「おくのほそ道」には新庄に滞在した記載は無い。大石田に3泊した後、新庄で2泊しており、この新庄にも熱心な俳人が居て、3度も歌仙を巻いているのに、芭蕉の筆からは落ちている。曾良の随行日記によると、元禄2年(1689)6月1日(陽暦7月17日)に大石田から新庄に入り、俳人渋谷甚兵衛(俳号:風流)宅に2泊している。風流は、芭蕉らが尾花沢を訪ねたことを聞き駆けつけており、その折の歌仙にも参加している。おそらく、その後、山寺から大石田に廻った芭蕉らの行程を知って、新庄にも立ち寄ってほしいと依頼をしたのであろう。新庄は戸沢氏の城下町。芭蕉らは、新庄で風流宅に宿泊したが、その兄で城下随一の豪商渋谷九郎兵衛(俳号:盛信)宅にも招かれ歌仙を巻いている。柳風・弧松・如柳・木端といったこの地方の俳人も加わっている。その発句が、

水のおく氷室尋る柳かな

芭蕉

平成30年(2018)7月1日 私は新庄に入り、久富哲雄著の「奥の細道を歩く事典」を参考にして芭蕉関連の史跡を訪ねた。事典によると、上記芭蕉の句に詠まれた氷室が地蔵屋敷と呼ばれた地であり、そのあたりが柳清水の跡と伝えられ、近くに地蔵堂が立っていると記されている。そして、その句碑がやはり近隣の八幡神社にあるとも。

これを頼りに、車のナビによってまず幼稚園のそばにある八幡神社に辿り着いた。神社があり、周りに小さな池らしきものとこれを囲む木々はあるが、句碑のようなものは見当たらない。丁度近所をパトロールし

ているお巡りさんがいたので問うてみたが埒が明かない。そのお巡りさんと話していた近所の方が門に出ていたの聞いてみると、「その句碑、確かに昔はあった。泉の湧く池があり」云々と。しかし、数年前に移築されたとのこと。その場所は「ああ行って、こう行って」と本人も説明し難らしく、諦めかけて、「じゃあ、一緒に行つてあげよう」と軽トラを繰り出し、「付いておいで」と合図してくれた。路地の様な所をくねくね曲がり、案内なしでは到底辿りつけない道であった。そして、そこはなんと、予めもう一件訪ねようと予定していた地蔵堂であった。句碑は句に詠まれた氷室の跡その場所に移築されていたのであった。



(芭蕉句碑)



(氷室清水跡)

尾花沢・大石田・新庄と、ここには東北に育まれた俳諧の連衆の地があった。芭蕉は「おくのほそ道」に「ここに古き俳諧の種落ちこぼれて・・・この道にさぐり足して、新古二道に踏み迷ふといへども、道しるべする人しなければ」と記している。



(おくのほそ道 行程地図)

室町期には、伝統的な連歌が宗祇等によって広められた。これに対して通俗滑稽を遊ぶ無心連歌が庶民の間に広まっていき、江戸期になると京を中心に松永貞徳によって「俳諧連歌」という文芸が確立していく。貞徳の一派は「貞門」と呼ばれ一世を風靡するが、これを古風として、大坂では西山宗因の庶民的な「談林」一派が台頭してきた。そんな背景の中で、伊賀の俳人松尾桃青（後の芭蕉）は、貞門の北村季吟から俳諧の指導を受けた後、江戸に出て、談林にも属しつつ独自の俳諧宗匠として、次第に注目されていく。延宝8年（1680）江戸外れの深川に居を移した後、禅師仏頂の影響も受けて俳風も変わり、名を芭蕉と改めて「蕉門」として一門を成していくこととなる。

芭蕉が「おくのほそ道」の旅をした頃は、まさにこれら「古き俳諧の種落ちこぼれ、新古二道に踏み迷う」状況にあったと思われる。俳諧連歌の文芸上の変革

を成さんとした思いを、この章段の一文から読み取ることが出来る。文芸の歴史の中で、衰退時に危機感を持って変革を成した例は数多認められる。200年後の明治期に成した正岡子規の俳句革新はその最も顕著な例である。

芭蕉が各地での滞在を含めつつ150日余りで成した旅を追ってみようと始めた「私の細道」であるが、ようやく、ほぼその半行程まで辿り着いた。2011年から2018年まで、8年を掛けて、時々、暇を見つけての追従旅であった。これから、最上川・出羽三山を経て、越後越中路から大垣へ向かうことになるが、この段階で芭蕉自身が思想的変化を起こしていったといわれている。興味深い領域に入っていくことになる。

ところが、残念ながら、私は昨2019年初頭に膝を痛めて1年間遠出が出来ず、そして、今年はコロナ禍騒ぎの為自粛を余儀なくされた。事態が落ち着けば是非続けたいと願ってはいる。

(パートナー 小松)

コラム「新聞記事スクラップから」

環境科学センターで作成している環境関連の新聞スクラップ記事から、話題性を考えてご紹介しています。平成25年5月9日の茨城新聞に、霞ヶ浦浄化センターに下水中のリンを回収する能力を上げる設備を導入する記事がありました。現行の処理水0.13mg/Lが0.08mg/Lに改善される見込み。同センターは1日に約8万立方メートルの下水を処理していますが、このうち約5万2千立方メートルの処理に適用するとのこと。リンが年間約1.5t削減され、価格高騰しているリン肥料として活用できるとのことです。

令和2年の今、霞ヶ浦の変化を注視してゆきたいと思います。

(パートナー 古田)

新パートナーのご紹介（敬称省略）

□ 佐伯正義 □ 栗山和子 □ 中山広子 □ 小高正人
□ 篠田あや乃 □ 渡邊あき世 □ 柏木暖心 （センター 樽見）

センターからのお知らせ

□ 霞ヶ浦ECOフェスティバル 2020 の中止について

さて、例年8月に当センター主催で開催しており、皆様に多大なる御協力をいただいております「霞ヶ浦ECOフェスティバル（旧夏まつり）」につきましては、新型コロナウイルス感染拡大の状況を鑑み、今年度の開催を中止することといたしました。楽しみにされていた皆様には大変申し訳ございませんが、何卒御理解いただきますようお願い申し上げます。（センター 永吉）

【訃報】

霞ヶ浦環境科学センター元センター長 前田修 様が令和2年6月4日享年84歳にて永眠なさいました。故人の冥福をお祈りし、謹んでお知らせ申し上げます。

<編集後記>



今号の編集は新型コロナウイルス(COVID-19)感染防止の影響をまともに受ける期間に入り、6月14日の編集会議には発行延期あるいわ2頁程度の原稿しか集まらないのでは？との覚悟で臨みましたが、蓋をあけてびっくり、いつもと変わらぬ6頁構成とすることが出来ました。ここに原稿執筆者皆様並びに関係者皆様に心から感謝申し上げます。

ただ残念なのは、初代センター長 前田 修先生ご逝去の報に接したことです。訃報に接して最初に私の頭をよぎったのはざっくばらんで飾らない先生のお人柄です。それはセンター開館まもない平成18年秋から平成19年春にかけての頃でしたか、センター中庭で一人シャベルをふるい、池を掘っている先生のお姿です。現在の「いきもののにわ」の礎となる池です。自分の思いどおりに池をつくりたいためか、パートナー等のお手伝いも不要とのことでした。

また、ある講座後のフリートークのとき、水質改善が遅々として進まない霞ヶ浦の「抜本的な水質改善策と云うのは、あるのでしょうか。」と先生にお訊ねしたところ、「それは流域に人が住まないことだよ。」と即座に答えたことです。

最後に先生にお会いしたのは昨年（令和元年）6月 NPO 茨城県環境カウンセラー協会総会の講演会講師としてお出でになった時で、終了後の懇親会の席で「今も（センターに）行っているの」の会話が最後となりました。ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。（パートナー 浅野）

「香澄」編集委員会：浅野明宏，尾形孝彦，有吉潔，廣原毅，栗原繁，樽見博文，大森那月